

新約聖書の背景 中間時代

中間時代とは

中間時代とは、旧約聖書の終わりの時代と新約聖書の始まりまでの間の、およそ 400 年間を指します。具体的には、イスラエル人がバビロニア捕囚からペルシャ王クロスにより解放されて、第二神殿が建設され、城壁が完成してから（ネヘミヤ記の記されている）、ローマ帝国支配下のユダヤでイエスが誕生するまでの、BC433 頃～BC7 年頃までの期間です。

中間時代のユダヤ

この時代にユダヤは、ペルシャ、ギリシャ、セレウコス朝シリア、エジプト、ローマなど、覇権を争う帝国間の争いに巻き込まれて政治的にも宗教的にも大きな変化を経験しました。旧約最後の預言者マラキ以降、バプテスマのヨハネが現れるまでイスラエルに預言者は現れませんでした。（マラキ 4：5、ルカ 1：17）

この時代についてはダニエル書 11 章に詳細な預言が書かれているほか、旧約聖書続編（カトリックが第二聖典として聖書に含む）のマカバイ記や古代歴史家ヨセフスの文書で知ることができます。

中間時代を学ぶ意義

新約聖書で登場するサドカイ派、パリサイ派などはこの中間時代に生まれた勢力です。また統治者であったヘロデー族や、ローマ帝国の支配も中間時代に始まります。この時代背景の中でユダヤの人々はどんな生活をし、どのような思いで救い主を待ち望んでいたか、そしてイエス・キリストはどのように受け入れられ、どのように拒絶されていったのか。中間時代を学ぶことでイエス・キリストの、そして新約聖書のメッセージの本質をより深く正しく理解できるようになります。そしてその特殊な歴史、文化に限定されない、現代の私たちにとっても必要なメッセージとして受け取ることができます。

BC433 エルサレム再建、第 2 神殿完成（エズラ記、ネヘミヤ記）

BC330 ギリシャ(マケドニア)の支配下に。

中
間
時
代

BC323 エジプト（プトレマイオス朝）の支配下に

BC168 シリア（セレウコス朝）が侵略、虐殺。

BC142 独立を果たし、平和な時代（パリサイ派、サドカイ派の誕生）

BC63 内紛に乗じてローマがエルサレムを侵略

BC37 ヘロデがユダヤの王（統治者）となる。

BC7? キリスト誕生（マタイ福音書）

ヘレニズムとヘブライズム

ヘレニズムとは、アレクサンドロスの東方遠征によって生じた古代オリエントとギリシャの文化が融合した「ギリシャ風」の文化。人間中心主義、合理的、理性主義。

ヘブライズムとは、ユダヤ教に基づく神中心主義。キリスト教に受け継がれました。

ヘレニズムとヘブライズムが西洋文化の源流とされています。

ヘレニズムのユダヤ人への影響

アレクサンドロスの東方遠征によって世界中に広まったヘレニズムは、その後の帝国にも引き継がれ、ユダヤにもその影響が及び、円形劇場などのギリシャ風建築や神殿などが各地に建てられました。そしてその文化、思想に共鳴するユダヤ人と、ユダヤ教の伝統（ヘブライズム）を脅かすものだと拒否するユダヤ人との対立を生み出しました。

一方でヘレニズムの中心地であるエジプトのアレクサンドリアへ移住させられたユダヤ人たち（BC300頃、10万人）はヘレニズム文化の中でコミュニティを作り、シナゴーグ（会堂）で礼拝していました。やがてヘブライ語が話せないユダヤ人も現れるようになりました。そのためギリシャ語の聖書（旧約）が必要となり、「七十人訳聖書」が翻訳されました。（BC250頃）「七十人訳聖書」のおかげでユダヤ人以外の人々も聖書を読めるようになり、聖書が世界中に広まったのです。新約聖書の中で引用されている旧約聖書は「七十人訳聖書」からであり、イエスの弟子たちも使っていました。

（「ギリシャ語を使うユダヤ人」という表現が使徒6：1に出てきますが、原語は「ヘレニスト」です。）

マカバイの反乱

宗教の自由は認められていた時代は良かったのですが、セレウコス朝シリアのアンティオコス・エピファネスは極端なギリシャ化政策を行いユダヤ教を禁止し、徹底的に迫害しました。神殿に偶像を置き、豚をいけにえとして捧げました。割礼を禁止し、それを破った母と子を虐殺したり、豚肉を食べることを強制し拒否するものを殺しました。

ところが当時の大祭司はこの政策を受け入れて、これを容認してしまったのです。

これに怒ったユダヤ人たちは、ユダ・マカバイの指揮の下に戦い、最終的に勝利し、独立を勝ち取ります。

ハスモン王朝

マカバイ家が世襲による統治者兼大祭司となり（ハスモン王朝）、一時的に平和な時代になりますが、やがて王朝内の権力争いに、ヘレニズムを受け入れるサドカイ派と、律法順守を掲げるパリサイ派の対立をも巻き込み、内戦状態となりました。

サドカイ派

大祭司一族や貴族階級を中心メンバーとする党派。モーセ 5 書のみを信じ、復活や終末、最後の審判などを認めない。支配帝国の権力には服従し、現行体制を維持しようとした。

パリサイ派（ファリサイ派）

律法を厳格に遵守しようとした集団。パリサイとは律法を守らぬ輩から自らを「分離」させるという意味。

ローマ支配

セレウコス朝が衰退しローマ帝国が勢力を増す中で、ローマ軍は内戦状態だったユダヤを征服し、イドマヤ人（聖書のエドム人）の将軍であるアンティパトロスがローマに取り入ってユダヤの総督に任じられました。

このアンティパトロスの息子ヘロデが、マタイ福音書 2 章に登場するヘロデ王となります。

ヘロデ王

ヘロデはその政治的手腕によりローマからユダヤ全土の王に任じられました。しかし彼は残虐で猜疑心に満ちた王でした。自身がユダヤ人でないことから、ユダヤ人の支持を得るために 80 年以上かけて荘厳な神殿を建築しました。しかし、ギリシャ風の都市を建設したり、ローマに迎合する姿勢は敬虔なユダヤ人の反感を買いました。

またハスモン王朝の娘（マリアンメー世）を妻としてその王座の正当性を確保しようとしたのですが、猜疑心からマリアンメー世とその母、またマリアンメから生まれた二人の息子を死刑にしました。イエス様誕生の知らせを聞いてイエス様を殺そうとし、また 2 歳以下の子供を殺害した（マタイ 2 章）のはちょうど同じころの出来事です。

ヘロデ王の息子たち

ヘロデ王死後、サマリヤとユダヤは息子アルケラオスが統治者に、ガリラヤは息子ヘロデ・アンティパスが領主（国主）となります。二人とも「王」とはなれませんでした。

ヘロデ・アンティパスはバプテスマのヨハネを殺しました。（マタイ 14：1）マタイもルカも正確に「領主（国主）」と記しています。（ルカ 3：1）

アルケラオス（新改訳ではアケラオ）はヘロデ王の死後に起こった反乱に対し大量虐殺を行い、ユダヤを混乱させたために皇帝により追放され、ユダヤ・サマリヤはローマ直轄になり、ローマから総督と軍隊が派遣されました。

イエス様を連れてマリヤとヨセフがエジプトから帰ってきたとき、アルケラオスを恐れたと記されています。（マタイ 2：22）

ヘロデ・アグリッパ一世

ヘロデ王に殺された妻マリアンメとの間の息子の子であるアグリッパは幼少期からローマで育てられ、皇帝の友となっていました。彼は叔父であるヘロデ・アンティパスを反逆で訴え、皇帝から祖父のヘロデ王に同様の領土と王の称号を与えられました。

彼もユダヤ人の関心を買おうとし、使徒ヤコブを殺害しました。(使徒 12 : 1, 2) アグリッパは、神に栄光を帰さなかったのが虫にかまれて死んだ(使徒 12 : 23)と書かれていますが、これは寄生虫が腸を破ってしまう症状で、ヨセフスによれば5日間激痛にのたうち回って死にました。

【詳細年表】

- BC330 ギリシャのアレクサンドロス大王による征服
ユダヤにヘレニズム(ギリシャ)文化が浸透する。宗教保守派の反発。
- BC323 プトレマイオス朝(エジプト)に支配下に。
ユダヤ人10万人がアレクサンドリアに強制移住
(ギリシャ語を話すユダヤ人の誕生)
- BC198 セレウコス朝(シリア)の支配。
- BC168 アンティオコス・エピファネスの徹底したギリシャ化政策、迫害、神殿冒涇
マカバイの反乱(マカバイ家5兄弟の活躍)
- BC142 独立(ハスモン王朝:マカバイ家が大祭司兼統治者)平和な時代
ハスモン王朝の内紛、パリサイ派とサドカイ派の対立
- BC63 内紛に乗じてローマがエルサレムを侵略
- BC37 ヘロデがユダヤの王(統治者)となる。